

記憶に残る学会

山本 俊幸

皮膚科は他科に比べて学会が多いとよくいわれる。これまで多くの学会に参加してきたが、長年を経てもなお記憶に残っているものは意外に少ない。学会で取り上げられたシンポジウムなどの企画や、講演単位では記憶に残るものはいくつもあるが、学会そのものとなるとほとんど記憶にない。大きな学会よりむしろ、ディスカッションに時間を割く膠原病・脈管研究会や水疱症研究会のようなこぢんまりとした会で見聞きしたり学んだ記憶のほうが多い。

もちろん、主催者側は一生懸命企画するし、終了直後は、会頭に賛辞の声が寄せられることと思う。「過去最高の出来栄でした」「これほど完成度の高い学会はみたことがない」などと褒めていただいても、時間が経つにつれ、人々の頭から消え去ってしまう。人の記憶なんてそんなものかもしれない。

その中で、何十年も前にどこかの学会で、「教授、あなたはアトピー性皮膚炎を治せますか？」というシンポジウムが企画された(どなたが主催された学会か覚えていない)。いまはアトピー性皮膚炎の治療薬は目覚ましく進歩し、新規のバイオ製剤を使えば重症例であってもある程度のところにもっていくことは研修医でもできる。当時は混沌とした時代で、ステロイド使用の是非についても意見が分かれた。十分な強さのステロイド外用薬を十分な量塗布し、軽快したらランクを下げていくことを強調する先生もいた。しかしそんなに理想的にいかない症例は当時多数経験していた。全身が苔癬化病変(皮膚の色調からして普通のアトピー性皮膚炎とまったく異なる)に変わってしまった症例などは何をやってもうまくいかない。私だけでなく、当時病棟医を経験していた教室員は皆わかっていた。他大学の教授(どなただったか忘れた)が手こずる症例を紹介したプレゼンを、西岡 清先生は、苦労している様が伝わり実際に患者をみていると評価していた。裏を返せば、上手くいった症例ばかり提示しても聴衆に伝わるものが少ないということだろう。

また、バイオ製剤の適応がない疾患には、いまの時代でも「あなたは～を治せますか？」という命題は通用するかもしれない。

さて、読者のみなさんはこれまで参加してきた学会で記憶に残るものはおありだろうか？学会参加歴20年以上の先生方に絞って、「私の記憶に残る学会企画」みたいな誌上アンケートを実施しても面白いかもしれない。